

『イエス・キリストは実在したのか？』

2014年07月25日

レザー・アスラン著『イエス・キリストは実在したのか？』（以下『実在』）を興味深く読んだ。アスラン氏はテヘラン生まれで、幼かった頃、イラン革命時に米国に渡っている。熱心なモスリムではないが、イスラム教文化圏で育っている。高校生時代、福音伝道キャンプでイエス・キリストを知り、感激してクリスチャンになった。その後、聖書を読む中で、歴史上の人物としての「イエス」と聖書に書かれた「イエス・キリスト」の間に隔たりがあるのではないかと疑問に思った。宗教学者になり「史的イエス」の研究に打ち込み、20年の成果として、この本を上梓したという。

「史的イエス像」は、現在かなりクリアになっている。歴史的な資料が少なく、パウロ書簡を含めた福音書とQ資料を基礎にしているから、学者によってニュアンスは多少違うが、描き出されたイエス像は極めて魅力的である。アスラン氏は「本書の狙いは、歴史上のイエスについて…情熱をもって世に広めることである」と書いている。

『実在』は3部からなり、1部は「ローマ帝国とユダヤ教」で、当時のローマとユダヤの社会状況と、そこにある確執を克明に描いている。古代の権力者たちは横暴で虐殺・殺害が日常的に行われ、民衆は耐え難い苦難を背負わされていた。ルカ福音書に記されているヘロデ王による幼児虐殺の記述は創作である。イエス誕生物語は後世の加筆だから、当然である。混沌とした世情を背景に、民衆の中から、メシアと名乗り「神の国」建設を闘い取ろうとする無謀な人々が輩出した。彼らはことごとく殺されていった。

2部は「革命家、イエス」で、この章が中心になっている。アスラン氏は次のように描き出している。イエスは、地上に「神の国」の樹立を目指して、弟子たちを集めながらガリラヤ全土を巡り歩き、社会変革を意図した熱烈な革命家であった。弱さと貧しさに追いやられていた民衆を愛し、無償でいやしを与えた。その愛は必然的に、腐敗堕落したエルサレム神殿の祭司階級に対し楯を突き立てた。ローマの支配に対しても「皇帝の印を刻んだデナリオンは皇帝に返すが、神のものである大地はイスラエルに返せ」と反抗するユダヤ人ナショナリストであった。そのイエスは、エルサレム神殿当局によって、ローマの手を借り、敗北していった。ピラトの裁判は事実と異なり、ローマ人向けに編集されている。ナザレのイエスは「キリスト」に負けず劣らずカリスマ的で、魅力に溢れ、賞賛される。アスラン氏は「ひとことで言えば、彼は信じるに値する人物だ」と言う。

3部は「キリスト教の誕生」で、革命に挫折したイエスが「キリスト・神」になっていた事情を書いている。イエスの信奉者たちは、イエスは復活したと断固として主張した。この復活によってキリストであることが証明されたと宣教し、キリスト教会が誕生していった。復活信仰はユダヤ教から逸脱しているが、歴史的な波紋は確実に広がった。これを担ったのはステファノやパウロなど、人間イエスと出会っていないディアスポラのユダヤ人たちであった。殊に、パウロの働きによってキリスト教は世界宗教になった。アスラン氏はこの出来事は歴史の範疇を超えた信仰の領域に属すると書いている。

「史的イエス」を「キリスト・神」と信じたのは人知では知り得ない「復活」という出来事であったことは確かである。復活がなければ、全てが虚無ではないかというのが、私の信仰である。